

# 痛み学

## 入門講座

◆ 44 ◆



森本 園宏（もりもと・まさとひろ） 大阪なんはクリニック本部長。平成元年、大阪医科大学大学院修了。同大講師などを経て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。31年4月から現職。医学博士。日本ペインクリニック学会名誉会員。

脊柱（背骨）のなかを走っている脊髄（脳から伸びている神経の束）が障害される「脊髄損傷」は、さまざまな事故などによって引き起こされる。たとえば、交通事故やスポーツ、墜落によって脊柱が潰れる、などである。その他にも腫瘍や梗塞、出血などによって脊髄が直接的に障害される、といったことも原因となる。

脊髄は、脳からの命令を体の各部に伝えたり、逆に各部からの情報を脳に伝えたりする機能を担っている。したがって、損傷されるとその部位以下の神経機能（運動や感覚）が麻痺し、自力での排尿や排便が困難となり、呼吸機能の低下などを生じる。頸部での損傷が多いが、損傷された部位が脳に近い程、麻痺を程度が発生がみられているが、これらの多くが15〜35歳代の若者であることは、深刻な問題である。健康な若者が、ある日突然、手足が動かなくなり、触れられて

下などを生じる。頸部での損傷が多いが、損傷された部位が脳に近い程、麻痺を程度が発生がみられているが、これらの多くが15〜35

歳の若者であることは、深刻な問題である。健康な若者が、ある日突然、手足が動かなくなり、触れられて

治療は、早期には副腎皮質ホルモン薬の投与、脊髄を圧迫している骨片や異物、血液を除去して脊髄を固定する手術などが行われている。その他では、リリカや抗うつ薬の仲間であるサインバルタが用いられている。1週間以内に運動や感覚に改善傾向がみられる

# 神経の誤作動が引き起こす

## 脊髄損傷後の痛み



イラスト 清水浩一

もまったく分からなくなるのだから、そのショックは計りしれない。

脊髄損傷に伴う症状は、直後に起こる場合と、脊髄周辺の出血や浮腫（むくみ）によって徐々に進行する場合とがあることから、交通事故による「頸椎捻挫」（いわゆるむちうち症）であっても、早期に適切な診断と治療を受けるべき（とは言うをまたない）。

場合には、他の身体機能の回復も期待できる。一方で6カ月経ってもこれらの機能が元に戻らない場合には、恒久的な麻痺となることが多い。これに対しては、現在、再生治療として、さまざまな細胞を培養して体内へ注入する治療法が考案されている。

さて、恒久的な障害を残した場合に、数週間〜数カ月後に、感覚が麻痺している部位に痛みを生じることがある。触ってもつねにも分らないのに痛いといった不思議な痛みが起るのである。この痛みは「脳卒中後痛」と同様に、「求心路遮断痛」としてのメカニズムによって発生する。つまり感覚を脳へと伝える神経の経路が損傷されると、その再構築の過程で神経の過剰活動が起きて、痛みを引き起こすのである。私は、この痛みに対して「脊髄刺激療法」（脊髄の背側に存在する空間に電極を挿入して通電する）を多く行ってきたが、その経験からは、脊髄機能の一部が残されている「不完全損傷」では、これにより良好な効果を得る可能性が高いと考えている。

第1、3日曜日に掲載します。